

フィールドの現在と研究

荻原 真子

筆者は二〇〇〇年三月の例会において「現代における口承文芸の条件——口承伝承のフィールドから」というシンポジウムを企画した。今回のシンポジウムの意図もその延長上にあり、「口承文芸の今日の状況がどのようなようであり、どのようななかかわり方があるのか」について、海外の情報を共有したいということにあつた。

発表者とテーマは以下のとおりである。荻原真子「先住民文化における言語の危機と口承文芸」、熊野谷葉子氏「ロシアからチヤストゥーシカの二十世紀と現在」、剣持弘子氏「イタリアから蓄積された資料と新しい資料と」、渡辺洋子氏「アイルランドの口承文芸——フィールド・ワークの現在と研究——アイルランド民間伝承委員会の活動と機関紙を通して——」、コメンテーター・坂井弘紀氏「カザフスタンの叙事詩の伝統と現在——カザフスタン西部、アトウラウを事例に——」である。以下は報告の骨子である。

筆者は前座を務め、シベリアの先住民社会における口承文芸

研究が言語学研究と不可分なかかわりをもつてることを紹介した。ロシアの口承文芸研究は長い歴史をもち、学問として確立しているが、ことシベリアに関しては未だに独立した専門領域とはなっていない。諸々の民族つまり先住民の口承文芸研究は古くは民族学、ソ連時代には主として言語学の一環をなし、テキストの採録は民族学者や言語学者によってなされてきた。二十世紀の社会主义体制のもとで各民族の言語状況は劇的な変化を遂げ、今日では言語の担い手は高齢化し、若年層では話されなくなっているのが一般的な傾向である。こうした状況の言語を言語学の領域では「消滅に瀕した言語」というカテゴリーで捉え、近年にはわが国でも大がかりな調査（『環太平洋の『消滅に瀕した言語』にかんする緊急調査研究』（文部科学省特別領域研究A））が行われた。その数多くの成果報告のなかにアイヌ語をはじめシベリア諸民族の民話のテキストがある。一方、ロシアでは一九九〇年ごろから「シベリアと極東諸民族のフォークロア遺集」（ノヴォシビールスク出版）として先住民およびロシア人（古くにシベリアへ移住してきた人々の子孫）の口承文芸のテキストが逐次刊行されてきた。現在では二十数巻を数え、原語のテキストにロシア語の対訳と注釈が付されている。今日のフィールドの状況に鑑みるなら、「言語の危機的な状況にある先住民」の口承文芸研究は言語学との協力のなかから新たな可能性を見出すことができよう。

熊野谷葉子氏は北ロシアにおいてフィールドワークの経験を持ち、「チャストウーシカ」に魅せられた研究者で、音声・映像資料を交えて報告した。「チャストウーシカ」とは「ロシア民謡のなかで最も新しくできたジャンルで、通常四行から成る短形詩で、アコーディオンやバラライカの伴奏で歌われ、踊りを伴うことが多い」。熊野谷氏はこの民衆歌謡のテーマと歌われる場の変遷を「(一)十九世紀にかけて、(二)ソ連時代、(三)ソ連崩壊後の三期に分け、歴史的に概観しながら今日の状況までを辿った。十九世紀から二十世紀にかけてチャストウーシカは農村の若者の間で糸紡ぎなどの手仕事の場で歌われ、若者たちの遊びであった。こうした遊びの集い「ボシヂエルカ」、「ベセーダ」の様子は文献にみられ、それには農村の陽気な若者たちの世界が活写されている。この即興性のあるチャストウーシカは、その後の革命と内戦、社会主義社会の建設という歴史的な背景のもとで「新しいテーマ」(革命、ゴルホーズ、機械化や独ソ戦争など)で、新たに登場した「場」で歌われるようになる。すなわち、「クラブ」(日本の「公民館」)のような施設で催される夕べの集い「ベエリック」や、森林伐採などの集団労働の場で歌い継がれた。そして、戦後、七十年代には農村から都市への人口の流出、特に若い娘の流出により、チャストウーシカは次第に衰退し、ソ連崩壊後には、「下品な」「不埒な」「禁じられた」チャストウーシカが噴出し、現在ではインターネット上に「ロシアのチャストウーシカ」というサイ

トが登場、相当にきわどい歌が飛び交っている。また、伝統の変容という点では、かつて婚礼で歌われ、花嫁を泣かせた儀礼歌(「のばし歌」)がチャストウーシカへと移行する例が挙げられたが、その歌には現代の若者の結婚とはかけ離れた昔日のロシア農村社会の結婚観が投影されている。

剣持弘子氏は留学経験を踏まえながら、調査と資料として、「(一)十九世紀のフィールドとカルヴィーノの仕事、「(二)カルヴィーノ以後—現状と新たなフィールド、「(三)不思議な話・怖い話のクローズアップ、「(四)インデックスの仕事、「(五)新しい資料の問題を紹介し、比較研究の実践報告として個人研究と共同研究について言及した。イタリアの口承文芸研究にはカルヴィーノ『イタリア民話集』の他、「歌われない口頭伝承」、『イタリアの魔法昔話のインデックス』など収集とインデックスの蓄積がある。しかしながら、今なお昔話が語られ、わらべ歌がうたわれている地方がある。それについて、剣持氏は師事したヴェントウレツリ教授のトスカーナ地方におけるフィールド調査について語った。教授は方言学と民間伝承を専門とし、二十八年にわたって昔話を収集している。剣持氏はヴェントウレツリ教授のフィールド調査に同行し、教授が古い昵懃の人々を訪ね、大人や子ども、高校生たちに昔話を語らせる現場の様子を紹介したが、大勢の子どもたちが昔話を語り、わらべ歌を歌っている情景は非常に新鮮で印象的であった。グリムを語る

子どもがいると、教授は「聴いた話を」と注意を促したというが、子どもたちは「知っている話」を語ろうとしたのだろう。それが本で読んだものか、聴き覚えた話なのかの区別は若い語り手にとってはさして問題にはならない。著名な研究者のフィールド調査におけるほんのちょっとした指摘から、筆者は日本の昔話を想い浮かべ、伝承のあり方を考えさせられ、大きな示唆を得た思いがした。

渡辺洋子氏はアイルランド民間伝承協会（一九二六年設立）とアイルランド民間伝承委員会（一九三五年設立）の沿革、委員会の活動、「アイルランド民間伝承ハンドブック」、機関紙『Bealoideas（民間伝承）』について、詳細な紹介を行った。アイルランド民間伝承（フォークロア）の収集を体系的に行う機関の設立にはそれに先立つ一〇〇年間に多くの作家、詩人、学者たちの功績があった。その先鞭をつけたのはT.クローカー（一八二五年に南西部の歌や物語を発表）であるが、その後詩人W.イエイツ、P.ケネディ、J.カーティンなどの収集、出版があった。このような流れを受けて、D.ハイドがゲーリック・リーグという全国組織をつくり、「アイルランド語、アイルランドの伝承文学の復興を一つの流れにした」。ハイドはユニヴァーシティ・コレッジ・オブ・ダブリン（UCD）の教授から後にはアイルランド共和国の初代大統領になる人物である。その助手であったJ.デラーシーが機関紙の編集にあたり、設立された

アイルランド民間伝承委員会の会長となる。こうした人と委員会との密接なかかわりによってアイルランド民間伝承の組織的な収集、整理、刊行がいかに周到に進められたかが明らかである。機関紙『Bealoideas』は協会成立の二年後からほぼ毎年刊行され、収集資料だけでなく、それに関する論評、フィールドからの報告記事を掲載している。そして、アイルランド民間伝承委員会は一九七一年に解消し、その役割と仕事はダブリン郊外のUCDのフォーカロア部に継承されて現在に至つており、そこには「二百万枚以上の資料、数万巻のテープ、そのほか写真など」が保管されている。こうして、アイルランドでの民間伝承が次世代に残すことに成功したことについて、渡辺氏はアイルランドの語り部、収集家、学者、政府の「愛と熱意と組織力」によるものであると結んだ。

最後に坂井弘紀氏はコメントに代えて、カザフスタンの西部、カスピ海北岸のアトウラウにおける叙事詩の伝統について映像資料を交えながら報告した。中央アジアのなかでも、カザフスタンではとりわけ叙事詩の伝統が強い。カザフ社会にはさまざまな類の詩人がおり、歌う詩の内容、活躍する場所、目的などによつて、アクン、ジュラウなどとよばれる。前者は吟遊詩人、一般的に詩人を指し、儀式の運営や情報の布告を行つた。後者はかつてはシャマン的な要素を帯びた詩人でハンやスルタンに近侍したが、現在ではもっぱら叙事詩を語る詩人のことである。

坂井氏はテュルク語系諸族の英雄叙事詩のなかでも広く流布している「ノガイ大系」の語り手ないしは創作者を突きとめることを意図した。カザフスタン西部では十五～十七世紀に著名な

詩人「ジユラウ」が輩出した。アサン・カイグ、スプラ・ジユラウ、ドスマンベト・ジユラウ、シャルキイズ・ジユラウなどという詩人の事跡を辿ると、当時のキプチャク草原の大地と社会状況が「ノガイ大系」という一連の叙事詩に投影されていることが明らかになる。また、今日では、伝統的スタイルの語り手はほとんど存在しないが、叙事詩については音楽大学で若手への教育が進められており、一方では新生国家の国づくりのシンボルとして政治的に利用されている側面もある。

今回のシンポジウムにおいても、歴史的、文化的背景を異にする地域のフィールドから現状に即した貴重な情報が提供された。それぞれの報告には今後検討に値する共通の問題のヒントが多々ある。いずれ、そのような問題を共通の俎上に上せて、検討できることを期待したい。

(おぎはら・しんこ／千葉大学)

国際口承文芸学会

第十四回世界大会報告

加藤 耕義

二〇〇五年七月二十六日から三十一日までの六日間にわたり、国際口承文芸学会 (SEFNR) 世界大会が、エストニアのタルトゥで開催された。大会にはおよそ二五〇名の参加者、二二〇の発表があり、大きな大会となつた。

タルトゥは、人口一〇万人ほどの静かな大学町であるが、エストニアでは首都タリンに次いで二番目に大きな町である。タルトゥ大学では民俗学の講座が一九一九年に開かれ、一九二五年には大学民俗学会が、一九二七年には資料館が、一九四七年には民俗学学科が設立されている。

私はこの大会に参加するのは初めてであったが、大会全体がとても友好的な雰囲気に包まれていたのが印象的であった。世界各国から集まつた研究者がそれぞれの発表に対し、批判的に討議するのではなく、深い興味を持つて耳をかたむけ、さかんに意見が交わされていたことは、この学会の特筆すべき点を感じた。

初日、受付では、国際口承文芸学会のマークが印刷された黒